

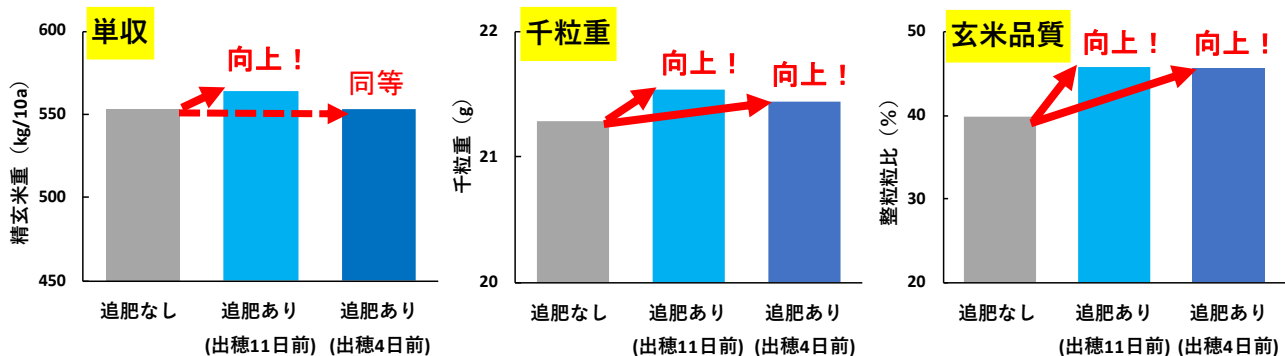
# 異常高温を意識した対策の実践を！

## ポイント

- 猛暑年には全量基肥(一発肥料)栽培では肥効が早まり、登熟後期に肥料切れを起こす傾向があることから、基肥と穂肥を分けて施用する**分施肥体系が収量・品質の確保に有効**です。  
たいしょごえ
- 全量基肥栽培の場合は、異常高温への対策として「**耐暑肥**」を実践しましょう。

## 耐暑肥の効果

夏季の高温における登熟障害(白未熟粒など)の発生を抑え、水稻の活力を維持するための追肥が「耐暑肥」です。



全量基肥栽培「コシヒカリ」に対する追肥効果  
(滋賀県農業技術振興センター 令和4年～令和6年)

- ◆ 以下の①または②の場合、**全量基肥栽培であっても、出穂11日前(幼穂形成期の14日後)から出穂4日前(早い穂が出始める頃)までに2kgN/10aを上限に追加施用**することで登熟の改善が図れます。※従来からの「実肥」とは異なります。

### ① 葉色が薄い場合。

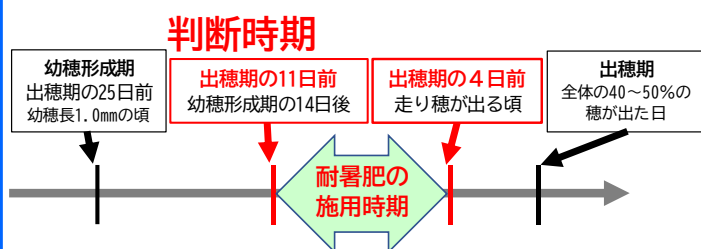
出穂11日前(幼穂形成期の14日後)までの葉色が、葉色板で4.0(SPAD値36)以下

- ② **生育が旺盛で籾数過多**が予想されるほ場において、**葉いもちが発生していない**場合。  
コシヒカリの目安(60株/坪：莖数25本/株以上) (50株/坪：莖数30本/株以上)

## 留意事項

- ◆ 水稻をよく観察し、**倒伏するリスク**も考慮して追肥を施用するか判断しましょう。また、**食味に影響しないよう施肥の遅れや過剰な施肥にならないよう注意**しましょう。
- ◆ **環境こだわり栽培**では、**有機質肥料**を使用するなど**施肥基準を順守**すること。
- ◆ 熱中症対策に留意し、散布方法はドローン等の使用を検討しましょう。

## 耐暑肥の判断時期と施用時期



## 主要品種別の目安時期

	幼穂形成期 (出穂期25日前)	出穂期11日前	出穂期4日前	出穂期
みずかがみ	6月27日	7月11日	7月18日	7月22日
コシヒカリ	7月2日	7月16日	7月23日	7月27日
日本晴	7月15日	7月29日	8月5日	8月9日
秋の詩	7月19日	8月2日	8月9日	8月13日

平成31年～令和5年の水稻奨励品種決定調査(滋賀県農業技術振興センター)の5年間の平均値。移植は5月10日、中苗(30日苗)。なお、実際の生育時期は当該年の気象や地域、移植時期等によって変動するので注意。

# 適期刈り取りを実践しましょう

- 収穫適期は籾黄化率（黄色く熟した籾の割合）が約90%となった時期です。
- 目安としては籾黄化率が50%となったら収穫適期まで約1週間となります。
- 特に、近年は出穂後の気温が高く、予想よりも早く収穫適期になることがあるので、適期の判断に注意しましょう。



籾黄化率 50%

調べたい籾をのせて左右の穂と比べましょう。この色が熟した籾の色の目安です。



籾黄化率 85~90%  
(収穫適期)

- ◆ 刈り取りが早すぎても収量品質が低下するので、適期の収穫に努めましょう。
- ◆ 多数のほ場があり、収穫に数日かかる場合は、籾黄化率約85%程度から刈り始めることで後半の刈り遅れを防ぐことができます。

## 近年、発生が目立つカメムシ類

### ■ ミナミアオカメムシ

体長12-16mm程度。一般的な斑点米カメムシ類に比べて、吸汁能力が高い。さらに、コメ以外にも麦、大豆、野菜など幅広い作物を加害します。



### ■ イネカメムシ

体長12~13mm程度。早生品種での被害が大きい傾向にあります。山地や雑木林から直接水田へ飛び込んできます。出穂した穂を吸汁し、加害が多いと不稔被害が発生することがあります。

防除は出穂期に行い、発生が多い場合には乳熟期(出穂7~10日後)にも防除する。



※ 薬剤の散布にあたっては、ラベルを確認し、農薬使用基準(使用時期・使用回数等)を遵守してください。